

● 洋畫家の見雅邦翁

▽黒田清輝氏談

▲人物性は分らぬ　平常往來もせず、例の美術學校改革の有た前、僅かに一年餘、翁と同職にゐた時、教授會議の席上語を交へた位で、其人物、性行の詳細は勿論、逸聞杯は尙更分らぬ。教授會議の折には、翁は始終沈黙を守つて、最後に嚴格なる斷案を下した、尤も人から聞いた所では、酒席の翁は酔ふに従つて随分畫論も行^やられた相である。翁の奇聞などは、斯の如くにして私には知る機會が無かつたのです。

▲西洋人には浮世繪　西洋人から見た翁と云へば、私は滯歐當時左様今より十四五年前、歐洲人は全く翁の在ると杯を知らなかつた、日本畫に就て知つて居る所は、純日本畫で無くて、却つて北齋や豊國等の浮世繪で在つた。畢竟現在の純日本畫を知らぬ許りでなく歴史的の研究の上からも、眞正の日本畫は知らなかつた様だ。茲になると佛蘭西のウエスレーや、西班牙のヴェスケラス等は能くも以前から廣く知られたものです、日本人が早く是等の人を研究した如く當時尙歐洲人には翁は知られなんだ、併し今日では左様で無からう、又夫が何うで在たにした處で、今日の翁たる者の眞價には些かの痛痒がない。

▲朦朧派の前途　是れ殆んど今の所謂日本畫に關する新進作家の據て以て起つ所で私の考ふる所杯でも恐らく將來は茲に一致するだらうと思ふ。常陸の五浦に團居してゐる大觀、觀山氏等が其先導者ですが、斯る日本畫界に一轉機を見んとするに至つたのも、其原は實に翁の勢力より胚胎して居るのです。成程、翁は純日本畫の研

究者で、今の朦朧派の人々の爲る所とは大分違つては居るが、是等の人々が新時代の新日本畫を樹立しやうと努力するに至つたは、全く研究心の旺盛なる翁の精神を享け繼いだ者と謂はねばならぬ。

▲岡倉氏との深契　　兩者不思議に能く合つた者で、岡倉氏は頭腦の人、翁は實に神技を以て之と相俟ち、而して最も能く岡倉氏を満足せしめた。翁と岡倉氏とを合體せしめた者は何人で在つたか知らぬが、岡倉氏は翁ありしが爲に絶頂の満足を得、翁は亦岡倉氏を得て更に其偉大なるを示した。私は何時も思ふ、此關係は恰度故小山氏と京都美術工藝學校長の中澤氏の如き者であると、故小山氏が彼程の妙腕を發揮し得たのも、實に中澤氏の在つた爲だと謂へませう、世人は翁と岡倉氏との關係を斯程迄深く思はぬ様であるが、否却々深い、默契か、默契か、實に此兩者の關係は妙を極めた者で、一代の巨匠の出づる實に偶然ならざるを思はしめるのです。

『東京朝日新聞』明治四二年二月六日

明治四二年一月二三日に没した日本画家、橋本雅邦についての談話。文中にもあるように、明治二九年に黒田が東京美術学校西洋画科の授業を依頼されてから、明治三年のいわゆる東京美術学校騒動で雅邦が岡倉天心に殉じて辞職するまで、二人は同職にいた。雅邦と岡倉天心との深契については、「批評家に望む」(本書五九〇、五九一頁)でも作家と批評家の望ましい間柄として引き合いに出している。